

共観福音書に見られる〈弟子〉の概念

増 田 早 苗

はじめに

聖書に見られる弟子の概念についての研究は、一般的に受ける印象ほどには多くなされていず、未だ決定的な論は出されていない。拙稿は共観福音書の伝承に見られる弟子の概念についての一考察であって、歴史的批判を含まない。また、この考察は二大文献説⁽¹⁾を前提とする。最初に共観福音書において弟子に関して用いられる語を概観し、第二部の資料批判の参考にする。

1 言語学的考察

1) *καλεω*⁽²⁾

“呼ぶ”を意味するこの語は新約聖書で頻繁に使われている。この語の有する神学的含蓄の深さを探るためには、新約聖書用語の主要な源となった旧約聖書の「七十人訳」における使用のされ方を見ると第二イザヤ書において最も頻繁に使われており、“名付ける”または“名を呼ぶ”を意味している。それも、次の個所に見られるように一定の目的、または使命のために呼ばれている(イザ41:9, 42:6, 46:11, 48:12, 48:15, 50:2, 51:2)。旧約聖書においては、名前は⁽³⁾単に人を区別するための符号ではなく、その名の持ち主と神秘的な同一性を持っているように考えられている。名を知ることは「その名の持ち主に対して何らかの力を有し、その名を呼ぶことにより、その名の持ち主に何らかの影響を及ぼすか、或いは、その力を

得ることができる」と考えられている。

次の例においては“名を呼ぶ”はさらに特殊な意味を含んでいる。

「わたしはあなたを名で呼んだ。あなたは私のものだ。」(イザ 43:1)

「わたしは主、あなたを名で呼ぶもの、イスラエルの神。」(イザ 45:3)

ここでは、“名を呼ぶ”は名付けられる者が名付ける者の所有となり、その保護を受けることを意味している。このように、ヤーウェはイスラエルを自分の民とされるのである。

新約聖書において *καλεω* はルカ福音書と使徒行伝にしばしば使われている。これら歴史書の中でよく用いられているのは、この時代に一般的に使用されていた語であったからであろう。マテオ福音書にも割合頻繁に使われてはいるが、マルコ福音書ではまれであるのは、多分この書がイエズスの言葉を余り多くはとどめていないからであろう。一般的に言って、この語は目的格補語を取り、“呼ぶ”(ルカ 6:46)、または“名付ける”(マタ 1:21, 23, 25, 10:25, 22:43, 45, 23:9, ルカ 1:13, 31, 59, 20:44)の意に用いられている。

καλεω が人に関して“何々へ呼ぶ”または“招く”という意味で用いられる場合もある(マル 3:31, マタ 2:7, 20:8, 22:3, 4, 8, 9, 25:14, ルカ 7:39, 14:7, 8 (2回), 9, 10 (2回), 12, 13, 16, 17, 14:24, 19:13)。福音書中、数か所においては、“呼ぶ”、或いは“招く”者は、神かイエズスである。マタイ書 2:15によれば、神は「エジプトからわが子を呼び出した」と言われる。イエズスは自分の弟子達を呼ばれ(マル 1:20, マタ 4:21)、また自分の使命は義人より罪人を呼ぶことにあると言われた(マル 2:17, マタ 9:13, ルカ 5:32)。

このように、共観福音書における新しい要素は、ナザレのイエズスが“呼ぶ”者であることである。旧約においてはヤーウェがイスラエルを自分の方へ招かれ、自分のものとしてその保護の下に置かれる。新約においてはイエズスが弟子を含む罪人を自分の方に招かれる。

2) *ακολουθεω*⁽⁴⁾

“つき従う”を意味するこの語は、旧約聖書において、ヤーウェにつき従うという意には使用されていない。多分この語の語源が他の神々につき従うという異教の表現にあったからであろう。彼等にとっては具体的に神につき従うということは神の超越性と相入れないように考えられたのであろう。

しかし旧約聖書においても宗教的意味なくして尊敬する人につき従うという意には使われている。ゆえに、兵士は指導者に従い（士師9:4, 49）、妻は夫に従い（エレ2:2）、エリシャはその師エリヤに従う（王上19:20）。この予言者と弟子の関係も尊敬以上のものでないことは、つぎに続く句が「彼に仕えた」とあることによって明らかである。ここでは弟子は召使いのように師につき従うのである。

新約聖書においても、“つき従う”は神に関しては使われていない。パレスチナでは一般にこのような表現は使われていなかったし、新しくこのような表現を作る必要もなかった。と言うのは、キリストにつき従うという新しい概念が起って来たためである。キリスト教がヘレニズムの世界に入った際も、この地で既存した神につき従うという宗教的、哲学的概念にもかかわらず、この語が他の宗教的意味に使われなかったのは、*ακολουθεω*がすでにキリストに、それも史上のイエズスに、“つき従う”という概念に定着していたためであろう。

新約聖書において *ακολουθεω* の使用がイエズスとの師弟関係に限定されていたことは、統計的に見ると明らかである。黙示録に1回使われている以外は、四福音書においてのみ使用されている。群衆がイエズスについて行った（マル3:7およびその平行個所、マタ8:10およびその平行個所）とか、狭義での弟子達がついて行った（マタ8:19）という場合、単なる外面的な行動を意味しているが、弟子達はイエズスにつき従がうためいっさいを捨て去る（マル1:18, 10:28, ルカ5:11）という場合、*ακολουθεω*

は他のすべての束縛を去って自己を全面的に投入することを含んでいる。イエズスの弟子は、外見上はユダヤ教のラビの弟子と同じことをするが、内的にはイエズスに自己を托すのである。ゆえに、この語は師弟関係を意味するのみならず、イエズスとの関係においては新しい含蓄を有している。新約聖書におけるこの語の特殊な用法および含蓄は、初代キリスト教においては唯一の師弟関係のみ、つまりイエズスとのそれのみがあったことに由来するのであろう。

さらに顕著な点は、師弟関係の概念に類する名詞が新約聖書において使われていないことである。動詞形だけがあるのは、新約聖書の表現しようとしていることが行動そのものであって、概念ではないからであろう。

3) μανθανω⁽⁵⁾

ギリシャ文明においては、この語は一般的に言って“何事かに心を向ける”ことを意味し、常に知的な過程とその外面的な影響を含んでいた。人間を対象とするときには、この過程はその人の個性と関連している。哲学界において使われるときにはこの語の知的な含みはさらに強くなり、個人を発達させるところの知的過程を意味した。

旧約聖書の七十人訳では、この語は55回使用されているが、常に神の啓示と関連している。そのため *διδασκω* “教える”と同様に特別なニュアンスを持つようになる。旧約において、神の啓示はその意志の表示であるから、この語は人が神の意志、特に律法において示されたその意志を行なう過程をも意味する。古代の哲学、倫理学における用法とは対照的に、聖書においては、この語は全人格に関して使われる。*μανθανω* においても *διδασκω* においても、対象と目標は同じなのである。知識を見聞によって学ぶとしても、それは最終的には実行し、成就させるためであって、それが何であるかは、神が定められるのである。

新約聖書においては、この語は全書を通じて25回しか使われていない。

その関連語 *διδασκω* がその四倍もの頻数で使われていることを考えると、更に意外な感がある。またこの語は、マルコ書で1回、マタイ書で3回、ヨハネ書で2回使われているが、ルカ書では1度も使われていない。*διδασκω* の総数の半分は福音書で使われているにもかかわらず、*μανθανω* はその五分之一のみが福音書で使われているのである。明らかにこの語は福音書の中心的関心事ではない。これは *μανθανω* の行為者を表わす形 *μαθητης* がイエズスと交わる人々を指す語として一般的である事実と対照的である。このことから真の *μαθητης* の特徴は *μανθανειν* “学ぶこと”ではなくて、*ακολουθειν* “つき従うこと”であると言える。これはイエズスの教えと一致するのであって、その目的は知識の伝達でも、現在の態度を深めることでもなく、無条件の献身を呼びますことであった。*μαθητης* が“つき従うもの”として、同時に“学ぶもの”であることは明らかである（「私のくびきを負うて、わたしに学びなさい。」マタ 11:29）。しかし、“学ぶこと”が人を *μαθητης* にするのではないのである。

3') μαθητης⁽⁶⁾

一般的にはこの語は *μανθανω* の行為者、“弟子”、“生徒”を意味する。この語が指す人は“学ぶこと”に従事しており、何らかの特殊な知識か技術を習得することを目的としている。それゆえ *διδασκαλος* “教えるもの”なくしては *μαθητης* はないのである。これは対応する人間関係を含むが、この場合、技術的、知的要素の方が内的交友関係より強い。

旧約聖書七十人訳では *μαθητης* は使われていない。また古代ギリシャ及びヘレニズム世界にあったような師弟関係、およびそれを表現する語にも欠けている。この事實は、イスラエルの宗教が啓示の宗教であったことに由来する。人の言葉は、神がご自身と、またその意志を知らせるために用いられる手段なのである。それ故、神の言葉を受けた者はそれを伝える責任がある。何故なら、その知識は自分のためにではなく神の民のために与

えられたからである。それゆえ、ある人が神の神秘について深い洞察力を与えられようと、それはその個人に対する反応ではなく、神の言葉に対する応答を呼び起すためである。

逆の表現をするならば、神はイスラエルの民全体を主に仕え、その意志を遂行するために選ばれたのである。選民であるとの旧約の民の意識は、“神の意志を自分の意志とする”との意を含む *μανθανα* の行為者を、他の選民から区別して特定の個人に使うことを不可能にした。

新約聖書においては *μαθητης* は 250 回近く使われているが、福音書と使徒行伝に限られていて、一般に考えられているように *μαθητης* は十二弟子の一人を指す特別の用語ではなく、種々の意味に使われている。

(a) 大きな運動の指導者に従う者を指す。たとえばモイゼの弟子（ヨハネ 9:28）、ファリサイ人の弟子（マル 2:18, マタ 22:16）、洗者ヨハネの弟子（マル 2:18-20, 6:29, マタ 11:2, ルカ 11:1, ヨハ 1:35-37 等）。

(b) 最も一般的にはイエズスに従う者を指す。この意味で福音書において使われている 230 回位のうち 90% 迄は、十二弟子に限られていないか、あるいはこの小グループを指すのかどうかははっきりしない場合である（マル 3:7, マタ 8:21, ルカ 6:13, 19:37）。

(c) 特に十二弟子の一人、または数人を指して用いられる（例、ルカ 9:54）。この意味で使用されている 20 回位のうち、半数以上はマタイ書においてであり、この書のみが“十二弟子”という呼び方をする（10:1, 11:1, 20:17 等）。マルコ書はこのような限定をしないが、時折この小グループを指しているようである。たとえば、一隻の舟に乗っている（6:45, 8:10）、一軒の家にいる（7:17, 10:10）、イエズスと親密に話している（4:34, 9:28）等。

初代教会においては、この語はキリストを信じる者を指した。使徒行伝では 22 回この意味に使われている。同様の意味で“聖徒”が 4 回、“キリスト信者”が 2 回、“ナザレ人の一人”が一回使われている事実と対照的

である。

4) διακονω⁽⁷⁾

語源的には“給仕する”という意味があるが、ギリシャ世界ではこの意味では余り使われない。より一般的なのは“養う”，“世話をする”という意味で、女性の仕事に関してしばしば使われている。これ等を基にして、包括的には“仕える”を意味する。

ギリシャ世界においては、仕えることは卑しいこととされていた。治めることは尊いことであるが、仕えることは国家に対する奉仕である場合にのみ人間の尊厳に価するとされる。彼らは自己の個性を完成させることを人生の目標と見なすため、この事実が隣人への奉仕の本質を決定する。つまり個性の調和的発達に全体の調和的発達と関連している。ゆえに政治家の奉仕は尊いとされる。

ユダヤ教は奉仕に関してより深い理解を持っていた。召使いが主人に、特に偉大な人に、仕えることは少しも卑しいこととは考えなかった。神と人間の関係についても同じように考える。七十人訳は *διακονειν* を用いず、ヘブライ語の同義語を *δουλευειν* とか、或いは祭儀に関しては *leitourgein* 又は *latreuein* と訳す。*δουλευειν* は奴隷として仕えることを意味し、服従が強調される。これに対し *διακονειν* は特に個人的に他人に仕えることを意味し、愛ゆえの奉仕の概念に最も近い。

イスラエル民族にはレビ記 19:18 にあるように愛の掟の伝統があった（「あなた自身のようにあなたの隣人を愛さなければならない」）。しかし後期ユダヤ教において、ファリサイ主義の中で正義の人と不義の人の差が生まれ、奉仕は他人のための犠牲というより、神の前での功德と考え、次第に、ふさわしくない者には奉仕をするべきではない、特に食卓で給仕すべきではない、との考えが起って来る。

新約聖書においてこの語はある個所では“給仕する”という意味に使わ

れている(ルカ12:37, 17:8, 22:27, ヨハ12:2)。イエズスは従来の評価基準を知っておられる(ルカ22:27a)が、新約の特徴は、この基準がくつがえされることである。それは師であり、主であるイエズス(ルカ22:29)が自ら給仕する者のようにしておられるからで(ルカ22:27)、これをその弟子達に求められる(ルカ22:26)。

他の箇所では、この語はイエズスに従っている女達について用いられる(マル1:31, 15:41, マタ8:15, 27:55, ルカ4:39, 8:3)“世話をする”, “奉仕する”と訳されるが, “給仕する”との関連性が見られる。

一方、マタイ書25:44で *diakonein* は空腹な人に食べさせ、かわいている人に飲ませ、旅人に宿を貸し、病気の人や獄にいる人を尋ねることを指し、行動に示された隣人愛を意味している。そしてこれが真の弟子の印しなのである。なぜなら、「わたしの兄弟のこれらの最も小さい者のひとりにしたのは、すなわちわたしにしたのである」(マタ25:40)から。そしてルカ福音書に示されたと同じく、この世の評価基準に対立するイエズスの価値観がマタイ書20:25-27、及びマルコ書10:42-44にも見られる。それはイエズス自身が仕えるために、それも多くの人々のため命を与えるために来られたからである(マタ20:28, マル10:45)。ここでは *diakonein* は、給仕、愛の奉仕のみならず、隣人のため命を献げることをも意味している。

以上を要約するならば、次のことが言えるであろう。

弟子の招きにおいて“呼ぶ”者はイエズスである。この場合、イエズスはその特別な関係にふさわしくないように見える者を招かれる。この招きに従う者はイエズスと生涯を共にする。言語学的考察からだけでも明らかことは、共観福音書に見られるイエズスの教え、及び初代教会の伝統によれば、イエズスの弟子、つまりキリスト者の使命は、イエズスの教えを“学び”、教えることのみではなく、イエズスに“つき従い”、自己を献げて他人に“仕える”ことにあるのである。

2 資料批判

イエズスによる弟子の招きにおいて前提となるのは、神の国の宣教である。神の国が近づいたとのよきおとずれが、弟子の招きに先立って告げられる事実は共観福音書に共通している。イエズスは神のみ霊に満ち（マル1:10, マタ3:16, ルカ4:14, 参照ルカ4:18）、ガリラヤに行き（マル1:14, マタ4:12, ルカ4:14）、神の国の教えを宣べ伝え始められる（マル1:15, マタ4:17, ルカ4:15 参照4:43）。マタイは“異邦人のガリラヤ”の宣教を預言者イザヤの予言の成就と考え（マタ4:15）、イエズスの使命の普遍性をここで明示している。

イエズスはガリラヤの海辺を歩かれる（マル1:16, マタ4:18, 参照ルカ5:1）。ユダヤ教のラビ達が教えを宣べ伝えるために歩き廻らなかつたのと対照的である。イエズスに最初に招かれ、“つき従った”人達は、共観福音書のいずれにおいても漁師であったとされている（マル1:16-20, マタ4:18-22, ルカ5:1-11）。彼らはパレスチナの普通の職業であった漁に従事しており、ファリサイ人や律法学者の弟子達と異なり、特別の教養もない。イエズスは彼らを別の種類の漁に呼ばれる。彼らの新しい仕事は人を漁ることである（マル1:17, マタ4:19, ルカ5:10）。イエズスは活動に従事しておられ、イエズスに従うものはその活動を共にする。座して弟子達に囲まれていた教師達とは異っていた。

漁師であったゼベダイの子、ヤコブとヨハネの招きにおいて、マルコ書によれば「父ゼベダイを雇人たちと一緒に舟において、イエズスのあとについて行った」（マル1:20）、マタイ書によれば「すぐ舟と父とをおいて、イエズスに従って行った」（マタ4:22）とある。家族の一員が招かれた場合、家庭の完全な分裂を意味するのではない。しかし、イエズスの招きが人間的絆を超越するものであることを示している。

彼らは舟をおいて、シモンとアンデレは「網を捨てて、イエズスに従っ

た」(マル1:18, マタ4:20, 参照ルカ5:11)とあるように、イエズスの招きは個人の所有物や生活の形にも先んずるものである。

ルカ書5:1-11は前述のマルコ書とマタイ書の招きの個所と平行のように見えるが、独立していて、伝承としてはヨハネ21章と同じものに属す。出来事としてはマルコ書とマタイ書と同じであって、イエズスとの出会いである。編集史的に見ると、マルコ書とマタイ書においてはイエズスの宣教の活動が最初にあり(マル1:15, マタ4:17), その後に弟子達が召されるが、ルカ書においては、弟子の招きの以前にイエズスは教えを宣べておられる(ルカ4:14-22, 31, 44, 5:3)ほか、悪霊を追い出し(4:33-35, 41), 病気を癒し(4:38-40), すでに人々はイエズスを権威と力を持った御者として評判している(4:37)。そしてこの招きの場面では、招かれる者の無力さと、それにもかかわらず信頼してイエズスの言葉に従う時に与えられる奇跡の実りとが対比されている。また、マルコ書とマタイ書においては、シモンは他の人達と同様に扱われているが、ルカ書では後に弟子達の間で指導的役割を与えられるシモン・ペトロの罪深さと、このような者を招かれるイエズスの慈しみの深さも対照されている。

招きが招かれる者の資格のゆえではなく、イエズスの慈しみのゆえであるとの理解は、ルカ書のみでなく共観福音書に共通していて、取税人の招き等において明らかに示されている(マル2:13-17, マタ9:9-13, ルカ5:27-32)。この三断片(ペリカペー)のうちマルコ書のものが共通資料と考えられるが、これによるとイエズスは通りすがりに収税所に座っている一人の取税人を見られる。マルコ書とルカ書によれば彼の名はレビであり、マタイ書によればマタイであった。イエズスが彼に、「わたしに従ってきなさい」と言われると、彼は立ち上って、イエズスに従った。ルカ書はここに“いっさいを *παντα* 捨てて”(5:28)を加える。ルカ書では、シモンとゼバダイの子ヤコブとヨハネの招きの折も、“いっさいを *παντα* 置いて”(5:11)とある。これはルカ書のみがイエズスの言葉として記録して

いる弟子の概念に関連していると考えられる。「自分の財産のすべてに *παισι* 別れを告げないものは、わたしの弟子にはなれない。」(ルカ 14:33)

この後、イエズスは彼の家で多くの取税人と食事を共にされる。ルカ書は「レビは自分の家で、イエズスのために盛大な宴会を催した」(5:29) を加え、招かれたレビの喜びと感謝の念を表している。取税人が罪人として当時のユダヤ人社会において軽蔑されていたことは、これられの三断片中五箇所において“取税人や罪人”という句が使われていることから明らかである(マル 2:15, 16 (二回), マタ 9:10, 11, ルカ 5:30)。

マルコ書には、マタイ書とルカ書からは消えている“取税人や罪人”に関する一句が残っている。「取税人や罪人はイエズスとその弟子たちと共に席についた。なぜなら彼らは多数で、イエズスに従っていた *ἠκολουθουν* からである。」(マル 2:15) *ἀκολουθεω* が宗教的含蓄深い語であることは言語学的考察で明らかになった通りである。マルコ書以外の二書は罪人が数多くイエズスに従っていたことは、余りにも強過ぎる表現と考えたのであろうか。

取税人や罪人と共に食事をするイエズスを見てファリサイ人達はつぶやく。イエズスは彼らに対し次のように答えられる、「丈夫な人には医者はいらない。いるのは病人である。」この言葉は三書において一語一語全く同じである(マル 2:17b, マタ 9:12b, ルカ 5:31b)。ファリサイ人のつぶやきの言葉が三書において少しずつ異っているのと対照的である。続く「わたしがきたのは、義人を招くためではなく、罪人を招くためである」(マル 2:17c, マタ 9:13b, ルカ 5:32) も、ルカ書において動詞“来る”の時制が他の二書と異っているほかは、三書において全く同じであって、これらの書の著者または編集者がこの言葉を重要視していることが考えられる。マタイ書編集者はこれら二つの言葉の間にホセア書 6:6 を引用した言葉を挿入している。「『わたしが好むのは、あわれみであって、いけにえではない』とはどういう意味か、学んできなさい。」(9:13b) この句の

挿入によってマタイ書編集者は弟子の招きにおけるイエズスのあわれみを強調しようとしている。ルカ書は後の言葉に短い句を追加している。「わたしがきたのは、義人を招くためではなく、罪人を招いて悔い改めさせるためである。」(5:32) ルカ書編集者は「罪人を招くためである」との表現は余りにも極端で、誤解を招くと思ひ、このような注釈の語を付加したのか。どちらかと言えば、このような心配は不要なのであって、イエズスの先の言葉からも明らかなように、イエズスが罪人を招かれるのは、彼らが病人であって癒されることを必要とするからなのである。

前述のように、ルカ書ではすべてを置いてイエズスに従うことが弟子たる条件とされていて(14:33)、シモンとゼベダイ兄弟の招きとレビの招きの断片(ペリカペー)において強調されている(5:11, 28)のを見た。しかし、この弟子たる条件はルカ書におけるだけではなく、マルコ書とマタイ書においても同様に考えられていることが、他の箇所から明らかである。ある金持の人(マタイ19:20によれば青年、ルカ18:18では役人であるが、マルコ10:17-22によれば単に一人の人)の招きに際して、イエズスは「わたしに従ってきなさい」(マル10:21, マタ19:21, ルカ18:22)と言われる。これはマルコ書によればイエズスがこの人を愛されたからである(10:21)。彼は「殺すな、姦淫するな、盗むな、偽証を立てるな、父と母とを敬え」などの律法を守ってきた人である(マル10:19-20, マタ19:18-20, ルカ18:20-21)。さらにマタイ書によれば自分を愛するように隣人を愛してきた人である(19:19b)。この人がイエズスに従う前にすべきことが一つある。持ち物を売り、貧しい人に与えることである(マル10:21, マタ10:21, ルカ18:22)。この箇所においてもルカ書は「持っているものをみな *παντα* 売り払って」とあり、“すべて”という点が強調されているが、根本的な考え方は共観書三書に共通であって、持ち物を貧しい人に与えてからイエズスに従うのである。

この断片(ペリカペー)に続くのは、三書共に共通して、富の危険に関

するイエズスの教えと、イエズスの弟子の受ける報酬に関するイエズスと弟子達の対話とである。この対話において、マルコ書とマタイ書によればペトロは「わたしたちはいっさい *παρα* を捨て、そしてあなたに従いました」（マル10:28, マタ19:27）と言う。ルカ書の平行箇所においては「わたしたちは自分のものを捨てて、あなたに従いました」（18:28）とあり、この箇所においてはマルコ書とマタイ書の方がイエズスの弟子達がすべてを捨てて従った事実を強調している。

イエズスの弟子たるものは持ち物すべてを貧しい人に与えるというのが共観福音書に共通して記されている伝承であることは前述の通りであるが、使徒時代及び幼年期の教会のキリスト信者達は、この教えを単に抽象的に理解したのではなく、具体的に実行することを理想としていたことは使徒行伝2:44-45, 4:32-36などからも明らかである。また、同じく使徒行伝5:3-4「そこでペトロが言った、『アナニアよ、どうしてあなたは、自分の心をサタンに奪われる聖霊を欺き、地所の代金をごまかしたのか。売らずに残しておけば、あなたのものであり、売ってしまっても、あなたの自由になったはずではないか』とあるように、資産を分ち合うことは強制されたのではなく、聖霊に従って自発的に行なわれたと考えられる。同様のことが経典外の歴史書からもわかるのである。西暦112年にガイウス・プリニウス・チェテリウスがトラヤヌス皇帝に宛てたビシニアにおけるキリスト教徒迫害についての報告書によると、キリスト教徒達は週の定まった日の朝早くに集り、賛美歌を歌い、偽り、盗み、姦淫、約束に対する不誠実、資産を差し出すようにいわれた時に否認することなどを避ける誓を立てるのを習慣としたとある⁶⁹⁾。

イエズスの招きが家族の絆に先立つことは、マルコ書とマタイ書においてゼベダイ兄弟がその父をおいてイエズスに従う（マル1:20, マタ4:22）行動に示されているのは、すでに見た通りであるが、共観福音書の伝承は多少言い換えられた形でイエズスの言葉をも記録していて、これがイエズ

スの望みであったことを示している。

「地上に平和をもたらすために、わたしがきたと思うな。平和ではなく、つるぎを投げ込むためにきたのである。わたしがきたのは、人をその父と、娘をその母と、嫁をその姑から仲たがいさせるためである。そして家の者が、その人の敵となるであろう。」（マタ 10:34-36, 平行ルカ 12:51-53）に見られるように、イエズスの招きに従うことが家族内の対立を招き得ることを暗示している。それは、続いてマタイ書に記されている十二弟子に向けられた言葉、

「わたしよりも父または母を愛する者は、わたしにふさわしくない。わたしよりもむすこや娘を愛する者は、わたしにふさわしくない。」（マタ 10:37）

にあるように、イエズスの招きは個人が個人の責任において答えるものであるからである。ルカ書の表現はさらに強く響く。

「だれでもわたしのもとに来て、父、母、妻、兄弟、姉妹、さらに自分の命までも 憎むのでなければ、わたしの弟子となることはできない。」

（ルカ 14:26）

ここで使われている“憎む”という表現は、「自分を愛するように、あなたの隣り人を愛しなさい」（ルカ 10:27-28）との命と対立する、“愛する”の反義語ではないと考えられる。なぜなら、この愛の掟において、利己的、自己中心的な心をもってではなく、神に向けられた心を前提として（「心をつくし、精神をつくし、力をつくし、思いをつくして、主なるあなたの神を愛しなさい。」ルカ 10:27-28）、自分自身、また他人を愛することが命じられているからである。ルカ 14:26の背後には比較級を知らないヘブライ語的表現法があって、“より少なく愛する”の意味であろう。しかし、これは家族をないがしろにするようにとの命でないことは、前述の金持の人の招きの場面（ルカ 18:17-22）からも明らかである。「何をしたら永遠の生命が受けられましょうか」との問に対し、イエズスは言われ

た、「いましめはあなたの知っているとおりで、『姦淫するな、殺すな、盗むな、偽証を立てるな、父と母とを敬え』。そしてこの人がこれらのことをみな小さい時から守っていたことを聞き、「あなたのすることがまだ一つ残っている。持ち物を売り、貧しい人々に分け、そしてわたしに従ってきなさい」と言われる。ゆえにイエズスに従うのは、これらの掟を守った上のことである。しかし、イエズスの時代的背景を考えるとわかるように、イエズスに従うことはユダヤ教を守る家族、同胞より村八分にされることを意味したし、福音書の書き下された頃のローマ世界におけるキリスト教迫害時代についても同様のことがいえる。このような状況にあって、個人の責任においてイエズスに従う場合、それに付随する結果をも負うことを意味するのであって、二次的なものを先行させ、従うか、従わないかの選択を定めるのではないのである。

マタイ書には家族内の対立に関する言葉に続いて、「また自分の十字架をとってわたしに従ってこない者はわたしにふさわしくない」（10:38）とあり、苦しみを伴わずにイエズスに従うことができないとの考えを明らかにしている。ルカ書の平行箇所には、「自分の十字架を負うてわたしについて来るものでなければ、わたしの弟子となることはできない」（14:27）とあり、前述の14:26と同様に弟子たる条件としてマタイ書に比してより明確化されているのは、マタイ書の言葉は布教に出る前の十二弟子に向けられているのに対し、ルカ書ではついて来た大勢の群衆に向けられた言葉（14:25）になっているからであろう。

マタ8:18-32、ルカ9:57-62にはイエズスの弟子に関する言葉が幾つかまとめてとどめられている。マタ8:18-32とルカ9:57-60bは共にQ資料を使っていると考えられる。第一の言葉は、イエズスのもとに来て、「あなたがおいでになる所ならどこでも従ってまいります」と言った人に向けられたもので、「きつねには穴があり、空の鳥には巢がある。しかし、人の子には枕する所がない」（マタ8:20、ルカ9:58）とある。後期ユダヤ

教においてダニエル7:13-14を元として、栄光、権威、権能の表象を持っていた「人の子」という語を、イエズスは自分を指して用いられる。しかしこの「人の子」は枕する所もない。マタイ書においてはイエズスに話しかける人は律法学者（8:19）であって、彼らにとって弟子となることは師の榮譽にあずかることであるのに対し、イエズスの弟子の身分が対照させられている。イエズスの弟子がすべての所有物を捨てて従うのは、それは師である「人の子」自身が枕する所もないからである。

続いて、「まず、父を葬りに行かせてください」と言う人に対し、「わたしに従ってきなさい。そして、死人を葬ることは死人に任せておくがよい」（マタ8:22, ルカ9:59, 60b）とあり、イエズスの招きが血縁の絆に先行することが強く表現されている。常に懇切丁寧なルカ書編集者は、すぐに続けて、「しかし、あなたは出て行って神の国を告げひろめなさい」（9:60c）を付加し、イエズスの強い要求の目的を説明する。イエズスの弟子達が血縁を去るのは、イエズスの神の国を告げひろめる使命を共にするためである。

ルカ書においてこれに続く9:61-62はルカ書に特有の資料である。「主よ、従ってまいります、まず家の者に別れを言いに行かせてください」という人に、「手をすきにかけてから、うしろを見る者は、神の国にふさわしくないものである」とイエズスと言われる。この言葉の背景には二つのイメージがある。第一は創世記19:26にあるロトの妻のイメージである。ソドムがその罪のゆえに滅ぼされる時、み使はロトとその家族に「のがれて自分の命を救いなさい。うしろをふりかえってみてはならない。低地にはどこにも立ち止ってはならない。山にのがれなさい。そうしなければ、あなたは滅びます」と言う。しかしロトの妻はうしろを顧みたので塩の柱になる。このイメージをもってルカ9:62は救いの緊迫性を浮き出しにしている。

第二のイメージは、当時のパレスチナの耕地の実状である。浅く、岩石

の多いこの地方の農耕において、すきに手をかけていて後をふり向くならば、すぐにすきを取られてしまう。この第二のイメージは第一のと共に招きに答えることが永続的なもので、一時的なものではないことを示唆する。

これまでの例によると、ἀκολουθεω と一つの句を作る語には、所有物、血縁に関し“すべてを捨てて”と、“自分の十字架をとって”があった。しかしイエズスの招きはこれにとどまらない。次の言葉は共観福音書に共通して一言一句同じようにとどめられている。「だれでもわたしについてきたいと思うなら、自分を捨て、（“日々”ルカ書のみ）自分の十字架を負うて、わたしに従ってきなさい。」（マル8:34b, マタ16:24b, ルカ9:23b）⁽⁹⁾ イエズスに従うことを決めたからには、自分自身に従うことを止めなくてはならない。それは自分の欲求の反対の行動をとるとするようなヤンセンイズム的な自己否定の考えのためではない。イエズスの望みを自分の望みとすることである。招きに従う結果当然起る苦しみを負う覚悟が必要とされる。それは師自身が、単に象徴的な意味にとどまらず、十字架を負った者であるからである。

この言葉は続く約束と結びついている。「わたしのため、（マルコ書には“また福音のために”が残っている。）自分の命を失なう者は、それを救うであろう（マタイ書には“それを見いだすであろう”となっている。）」（マル8:35, マタ16:25, ルカ9:24）すなわち、イエズスに従うために、そしてそれはマルコ書が明らかにしているようにその使命を共にするために、自分の命を失なう者はそれを救うとの約束である。注目に値するのは、この報いの約束が、共観福音書に共通してイエズスの受難、死、復活の最初の予言に関連して記されていることである（マル8:31, マタ16:21, ルカ9:22）。この基になっている考えは、師たるイエズス自身が復活秘義を生きられるゆえに、その弟子は、イエズスの使命を共にし、それゆえ、その苦しみ、また死をも共にするが、その復活にもあずかるということで

あろう。

財産、家族、自分自身をも捨ててイエズスに従い、神の国の福音を告げる使命を共にするため、苦しみ、死をも共にしたとしても、まだイエズスの弟子に欠けているものがある。マルコ書とルカ書によれば、イエズスの弟子達が自分達の間で誰がいちばん偉いかといさかいをした時（マル 9:33-34, ルカ 9:46）、マルコ書によれば、イエズスは「だれでもいちばん先になろうと思うならば、いちばんあとになり、みんなに仕えるものとならねばならない」（9:35）と言われる。そして一人の幼な子を取上げて、彼らの真中に立たせ、それを抱いていわれる。「だれでも、このような幼な子のひとり

を、わたしの名のゆえに受け入れる者は、わたしを受け入れるのである。そして、わたしを受け入れる者は、わたしを受け入れるのではなく、わたしをおつかわしになったかたを受け入れるのである」と（マル 9:36-37）。ここで明らかになることは、イエズスの弟子は地位や名声よりも人に仕えることを求めるはずであるということである。ここで仕えるとは小さい者を暖かく（「それを抱いて」マル 9:36）受入れることを意味している。保護や援助を必要とし、世間的栄誉、権勢を報いとしてもたらさない者を暖かく受入れることは、イエズスを受入れることのみでなく、イエズスを遣わされた天の御父を受入れることを意味する。小さい者の一人を受入れることはイエズスとの親しい関係を意味するのである。どこに師を受入れない弟子があるだろうか。

ルカ書はマル 9:35 の言葉をとどめていないが、幼な子についての言葉はほとんどマルコ書そのままをとどめ、それに独自の資料を付加している。「あなたがたみんなの中でいちばん小さい者こそ、大きいのである。」（9:48c）ルカ書の強調点は、小さい子供（子供 *παις* の指小語 *παιδιον* が使われている。）を受入れる者は、地位や権勢においては最も小さい者であっても、師たるイエズスを受入れ、また彼を遣わされた御父を受入れるがゆえに偉大であるとの考え方と思われる。

マタイ書では、子供に関する言葉の背景が少し異っていて、弟子達が天の国では誰がいちばん偉いかをイエズスに尋ねに来る (18:1)。マル9:35はやはりここでもとどめられていないが、子供についての言葉にマタイ書は独自の資料を挿入している。

「心をいれかえて幼な子のようにならなければ、天の国にはいることはできないであろう。この幼な子のように自分を低くする者が天の国でいちばん偉いのである。まただれでも、このようなひとりの幼な子を、わたしの名のゆえに受け入れる者は、わたしを受け入れるのである。」(マタ 18:3-5。マル9:37bはマタ10:40bに使われている。)

このマタイ書独自の資料は、弟子達が榮譽、地位等を求めることをいさめ、幼な子のようになることを勧めている。幼な子を受入れることは榮譽、地位をもたらさない。しかし、イエズスの名のゆえに幼な子を受入れる者はイエズス自身を受け入れる。

以上のように、三福音書に共通しているのは、一人の幼な子を受入れることは、イエズスを受入れることであり、イエズスの弟子として、師を受入れたいならば、自分を低くして最も小さい者の一人にも仕えるはずであるとの考え方である。

イエズスが自分の弟子達にさらに求められたことがある。マルコ書とマタイ書によれば、苦難、死、復活についての第三の予言の後 (マル10:32-34、マタ20:17-19)、マルコ書によればゼベダイ兄弟のヤコブとヨハネが、マタイ書によればゼベダイ兄弟の母が、イエズスのもとに来て、栄光をお受けになる時、二人の兄弟がその左右の席に着くことを願う (マル10:35-37、マタ20:20-21)。マタイ書編集者は、特別に選ばれた十二弟子の二人が、それも十二人の中でも特別の恵みを受けていたペトロ、ヤコブ、ヨハネ (マタ17:1、26:37)の中の二人が、これほど人間的な弱さを示す願いをすることを恥じ、マルコ書の資料に加筆したのであろうか。しかし実際はマルコ書の理解の方が深いのであって、イエズスの弟子達はこ

れほど師の思いからは遠く、人間的弱さを持った人達であったので、それゆえにこそ、イエズスの招きの慈しみと、復活後のキリストの与えられる力とがわかるのである。

一方、この二人のことを聞いた残りの十人が憤慨する（マル 10:41、マタ 20:24）のに対し、イエズスは、「異邦人の支配者はその民を治め、また偉い人たちは、その民の上に権力をふるっている。しかし、あなたがたの間では、そうであってはならない。かえって、あなたがたの間で偉くなりたいと思う者は、仕える人となり、あなたがたの間でかしらになりたいと思う者は、すべての人の僕とならねばならない」と言われる（マル 10:42-45、マタ 20:25-27、参照マタ 23:2-12）。人間的な目で見れば、偉い者は人を治め、権威をふるう者であるが、イエズスの弟子達は互に僕のように仕え合うことが求められている。“仕える”ことはマルコ書の前述の個所によれば人を暖かく受入れることであった。マタイ書では、羊飼いが羊と山羊とを分ける 譬話において“仕える” *diakoneō* という語が使われ（25:44）、空腹の人に食べさせ、かわいている人に飲ませ、旅人に宿を貸し、裸の人に着る物を与え、獄にいる人を尋ねることを意味することは、言語学的考察において見た通りである。ここでわかることは、マルコ書においても、マタイ書においても仕えることは隣人に対する愛の実践を意味し、イエズスの弟子達は互に愛し合い、愛の実践を行なうはずであるということである。

イエズスの弟子からこれが求められる理由は、「人の子がきたのも、仕えられるためではなく、仕えるためであり、また多くの人のあがないとして、自分の命を与えるためである」（マル 10:45、マタ 20:28）に見られるように、人の子である師自身が人に仕え、命までも与えられたからである。

ルカ書編集者はマルコ書のこの個所の伝承を知っているらしく、これによく似た言葉を独自の資料の中に使っている。

「異邦の王たちはその民の上に君臨し、また、権力をふるっている者たちは恩人と呼ばれる。しかし、あなたがたは、そうであってはならない。かえって、あなたがたの中でいちばん偉い人はいちばん若い者のように、指導する人は仕える者のようになるべきである。食卓につく人と給仕する者と、どちらが偉いのか。食卓につく人の方ではないか。しかし、わたしはあなたがたの中で、給仕をする者のようにしている。」（ルカ 22:25-27）

ここでも同様に、一般の考え方では支配する者が偉いとされているが、イエズスの弟子達は互に仕えることを求めるはずであるとの考えが見られる。人間的な見地から言えば、食卓につく者の方が、給仕する者より偉いことは認められている。しかし、イエズスの弟子達には仕える者となることが求められているのは、師自身が弟子達に対して給仕するもののようにしておられるゆえなのである。

この個所では *deakoneu* は“食卓で給仕する”の意に用いられている。それでは、イエズスの意味されたのは、その弟子達は互に食卓で給仕し合うようにということだけであろうか。ルカ書編集者がイエズスの教えをこのような浅い意味に理解していなかったことは、この言葉の言われたとされている場を考えると明らかになる。ルカ書ではこの言葉は最後の晩餐の時に言われたとされている。この席でイエズスは、「パンを取り、感謝してこれをさき、弟子たちに与え」（22:19b）、また、「食事ののち、杯も同じようにして」（22:20a）、とあるように、弟子達に給仕をされた。このパンと杯を与える時に、「これは、あなたがたのために与えるわたしのからだである」（22:19b）、また、「この杯は、あなたがたのために流すわたしの血で立てられる新しい契約である」（22:20b）と言われる。ここで、イエズスの給仕とは、自分自身を、からだも血も、その命までも、人々のために与えることを意味している。一方、弟子達は、この直後、自分達の中で誰がいちばん偉いだろうかと論争を始める（22:23-24）。このような場でイエズ

スが言われるのが22:25-27の言葉であり、ルカ書においてはイエズスが弟子達に与えられる教えとして最後のもので、遺言のように扱われているため、ルカ書編集者が特にこの教えを重大視していることが考えられる。

その教えとは、イエズスの弟子達は君臨し、権力をふるうことを求めるべきではなく、互いに仕え合うべきであること、また、イエズス自身が人人を愛し、そのために命を与えられたがゆえに、弟子達も師のなされたように、互に愛し合い、命を与えるまで、仕え合うべきということである。命を与えるとは、自分の生命を他人のために用いることであり、犠牲的な愛の極みを意味する。

以上に見たように、共観福音書を通じて、イエズスの弟子達は互に愛し合い、仕え合うべきであるとの考えが見られる。そして、それは師であるイエズス自身が彼らを愛し、彼らに仕え、彼らのために命をも与えられたからである。このように見て来ると、マルコ書の中に見られる弟子の受ける報いについての一見不可解な言葉の意味が明らかになる。

「だれでもわたしのために、また福音のために、家、兄弟、姉妹、母、父、子、もしくは畑を捨てた者は、必ずその百倍を受ける。すなわち、今この世では家、兄弟、姉妹、母、子および畑を迫害と共に受け、また、きたるべき世では永遠の生命を受ける。」（マル10:29-30）

マル9:35において、イエズスのため、また福音のため自分の命を失なうものはそれを救うことが約束されているのは前述の通りである。しかしここでは、イエズスのため、また福音のために所有物、家族を犠牲とした者は、永遠の生命を約束されるだけでなく、この世においても、迫害があっても百倍の報いを約束されている。それは、家、畑もあれば、親、兄弟、姉妹、子供もある。イエズスの弟子達は、自分の生命までもつくり互に愛し合い、仕え合うことを望むがゆえに、弟子となる者は、家族同様に自分の持ち物を分かち合い、必要とあれば命までも捧げてくれる人々を見出すのである。それが百倍であるのは、このような家族同様の人々は、

イエズスに従うすべての人を含むからである⁽¹⁰⁾。

ルカ書の平行箇所は「だれでも神の国のために、家、妻、兄弟、両親、子を捨てた者は、必ずこの時代ではその幾倍をも受け、また、来るべき世では永遠の生命を受けるのである」(18:29-30)となっている。ここでも、来るべき世での永遠の生命はマルコ書と同様に約束されているが、この世での報いは、百倍が幾倍になっている。マタイ書では、「わたしの名のために、家、兄弟、姉妹、父、母、子、もしくは畑を捨てた者は、その幾倍もを受け、また永遠の生命を受けつぐであらう」(19:29)となっている。これをマルコ書の平行箇所と比べると、百倍が幾倍となり、またその報いがこの世のものであるとは明確にされていない。永遠の生命の約束は明らかであるが、所有物、家族を捨てた者がその報いを必ずしもこの世で得るとは言っていない。前節(19:28)が“世の改った”時のことを言っており、本節後半が永遠の生命の約束であることから、どちらかと言えば、来世の報いに関するようである。

しかし、マタイ書編集者が、マルコ書、ルカ書編集者達と同様の考えを持っていたことは別の断片(ペリカペー)からわかるのである。共観福音書に共通した次のような資料がある(マル3:31-35、マタ12:46-50、ルカ8:19-21)。イエズスが群衆に話しておられる時にその母と兄弟たちとがイエズスのところに来る。母と兄弟とが外にいるとの取次ぎの言葉に対して、イエズスは、マルコ書とルカ書によれば、「神のみこころ(ルカ書では“み言”)を行なう者が、わたしの母、わたしの兄弟である」と言われる。マタイ書では他の二書と異って、この言葉は弟子達について言われている。

「そして弟子たちの方に手をさし伸べて言われた、『ごらんなさい。ここにわたしの母、わたしの兄弟がいる。天にいますわたしの父のみこころを行なう者はだれでも、わたしの兄弟、また姉妹、また母なのである。』」

ここで見られるようにこの言葉は弟子達について言われているのみならず、他の二書においては“神”とある所が、マタイ書では“天にいますわたしの父”となっていて、家族関係が強調されている。三福音書を通じて、神のみこころを行なう者はイエズスの家族であり、互に親しい絆によって結ばれているという考えが見られるが、マタイ書ではこの考えが特に弟子達に当てはめられている。

以上から明らかになることは、共観福音書の伝承に共通して次のような考えが見られる。イエズスの弟子は、この世では苦難、死を共にし、後の世で復活の喜びを共にするのみでなく、この世においても、苦しみはあっても(マル10:30)、喜びもまた共にするのである。それは愛し合い、仕え合う弟子同志の喜びのみではない。幼な子の一人を受入れる者はイエズスを受入れるのである(マル9:37, マタ10:40, ルカ10:16)から、互に喜びを分かち合うことは、イエズスと喜びを共にすることを意味するのである。

お わ り に

共観福音書に見られる弟子の概念としてまとめるならば、次のようなことが言えるであろう。イエズスは神の国のよきおとずれを伝える活動に従事しておられる。そして人々をその漁りの仕事に招かれる。招かれる者は、その資格のゆえにではなく、イエズスの慈しみのゆえに招かれる。招きに従う者はすべてを置いて、所有物、家族、自分自身を捨てて、イエズスに従う。それは師であるイエズス自身がそうなされたからであり、神の国の福音を告げるイエズスの使命を共にするからである。ルカ書は、この招きに従うことは一時的なものではなく、永続的なものであることを明らかにしている。イエズスに従うことは、その使命を共にすることであり、ゆえにその苦しみ、および死をも共にすることを意味するが、またその復活も共にすることを約束されている。

イエズスの弟子にさらに求められているのは、自分を低くして最も小さい者の一人をも受入れることである。それはイエズスを、さらに御父を受入れることを意味する。また、イエズスの弟子達は互に愛し合い、仕え合うべきである。それはイエズス自身が彼らを愛し、彼らに仕え、そのために命までも与えられたからである。互に愛し合い、仕え合うことによってイエズスを受ける弟子達は、来世において復活の喜びを共にするのみではなく、この世においても喜びを共にするのである。

言語学的考察において明らかになった通り、“弟子”とは福音書においてはほとんどの場合イエズスに従う者を指し、限られた小グループを意味しないこと、また、使徒行伝に見られる使徒時代の教会においてはキリストを信じる者を指したことを弟子の概念と考え合わせると、弟子に求められるものはキリスト者一人一人に求められていることを意味する。キリストの招きに従い、他人に対する愛の献身によってキリストの苦しみと喜びを共にし、神の国を伝える使命を共にすることを、個人の責任において選択し、所有物、自己を越える人生の目標として求め続けることがすべてのキリスト者に求められていることに気付く。

初期キリスト教に多大の影響を及ぼしたマニ教⁽¹¹⁾においては、厳しい禁欲的生活をするエリート・グループと一般信徒とに分けられ、後者はエリート・グループと生活費の寄付等により関連さえ保っていれば不品行な生活をしていても救いを得ると考えられていた。彼らに求められていたのは単にマニを信じることであった。このような二グループをキリスト教教会内に作ることは、キリストの招きが意味する大きな信頼と期待、およびそれに従うための神の助けの約束（マル 10:27、マタ 19:26、ルカ 18:27）を軽んじることであろう。

注

1. 二大文献説とは、マタイ書とルカ書の著者は現在のマルコ書の前身となったもの、及び言説を中心とするQ資料と口碑を使ったとする説。Vincent Taylor,

- Life and ministry of Jesus* (New York, n.d.) pp. 20-25 参照。
2. Gerhard Kittel, “καλεω,” *Theological Dictionary of the New Testament*, ed. by G. Kittel, transl. and ed. by Geoffrey W. Bromiley (Michigan, 1965) vol. III, pp. 487-491.
Georg Molin, “Vocation,” *Encyclopedia of Biblical Theology*, ed. by Johannes B. Bauer (London, 1970) vol. III, pp. 954-958.
 3. John L. McKenzie, “Name,” *Dictionary of the Bible* (Milwaukee, 1965) pp. 603-605.
 4. Kittel, “ακολουθεω,” TDNT, vol. I (1964), pp. 210-216. Charles Augrain, “Suivre,” *Vocabulaire de Théologie Biblique*, ed. by Xavier Léon-Dufour et al. (Paris, 1966) pp. 1032f.
 5. Karl Heinrich Rengstorff, “μανθανω,” TDNT, vol. IV (1967), pp. 390-461.
 6. Pierson Parker, “Disciple,” *Interpreters’ Dictionary of the Bible*, ed. by George Arthur Buttrick (N.Y.: 1962) vol. I, p. 845.
Elmar M. Kredel, “Disciple,” *Encyclopedia of Biblical Theology*, vol. I, pp. 209-213.
 7. Hermann W. Beyer, “διακονεω,” TDNT, vol. II (1964), pp. 81-87.
 8. Devid M. Stanley. *The Apostolic Church in the New Testament* (Maryland, 1965) pp. 98f.
 9. Robert Koch, “Self-denial,” *Encyclopedia of Biblical Theology*, vol. III, pp. 833-839.
 10. Johannes B. Bauer, “Brother,” *Encyclopedia of Biblical Theology*, vol. I, pp. 88-90.
 11. Robert Haardt, “Manichaeism,” *Sacramentum Mundi* ed. by Karl Rahner et al. (London, 1969) vol. III, pp. 372-376.

参 考 文 献 目 録

- Augrain, Charles. “Suivre,” *Vocabulaire de Théologie Biblique*, ed. by Xavier Léon-Dufour et al. (Paris: Les Editions du Cerf, 1966) pp. 1032f.
- Bauer, Johannes B. “Brother,” *Encyclopedia of Biblical Theology*, ed. by J.B. Bauer (London: Sheed and Ward, 1970) vol. I, pp. 88-90.
- Beyer, Hermann W. “διακονεω,” *Theological Dictionary of the New Testament*, ed. by Gerhard Kittel, transl. and ed. by Geoffrey W. Bromiley
- Haardt, Robert. “Manichaeism,” *Sacramentum Mundi*, ed. dy Karl Rahner et al. (London: Burns & Oates, 1969) vol. III, pp. 372-376.

- (Michigan: Wm. B. Eerdmans) vol. II (1964), pp. 81-87.
- Kittel, Gerhard. “ἀκολουθεω,” *Theological Dictionary of the New Testament*, vol. I (1964), pp. 210-216.
- . “καλεω,” *Theological Dictionary of the New Testament*, vol. III (1965), pp. 487-491.
- Koch, Robert. “Self-denial,” *Encyclopedia of Biblical Theology*, vol. III, pp. 833-839.
- Kredel, Elmar M. “Disciple,” *Encyclopedia of Biblical Theology*, vol. I, pp. 209-213.
- McKenzie John L. “Name,” *Dictionary of the Bible* (Milwaukee: The Bruce Publishing Company, 1965) pp. 603-605.
- Molin, Georg. “Vocation,” *Encyclopedia of Biblical Theology*, vol. III, pp. 954-958.
- Parker, Pierson. “Disciple,” *Interpreters’ Dictionary of the Bible*, ed. by George Arthur Buttrick (New York: Abingdon, 1962) vol. I, p. 845.
- Rengstorf, Karl Heinrich. “μανθανω,” *Theological Dictionary of the New Testament*, vol. IV (1967), pp. 390-461.
- Bultmann, Rudolf. *Theology of the New Testament*, 2 vols., transl. by Kendrick Grobel (New York: Charles Scribner’s Sons, 1951).
- Schnackenburg, Rudolf. *The Moral Teaching of the New Testament* (New York: Herder and Herder, 1965).
- Stanley, David M. *The Apostolic Church in the New Testament* (Maryland: The Newman Press, 1965).
- Taylor, Vincent. *The Gospel according to St Mark*, 2nd ed. (London: Mcmillan, 1966).
- . *The Life and Ministry of Jesus* (New York: Abingdon, n.d.).
- 聖書としては the Nestle Greek Text と日本聖書協会による日本語訳とを使用した。